



小島烏水全集

第十卷

大修館書店

小島烏水全集 第十卷 (第五回配本)

定價八八〇〇圓

昭和五十五年七月二十日印刷
昭和五十五年七月三十日發行

著者 小島烏水

發行者 鈴木敏夫

印刷者 青木勇

發行所 株式會社 大修館書店

東京都千代田區神田錦町三十二四
電話〇三(二九四)二二二一(代表)
千一〇二振替(東京)九一四〇五〇四

第十卷 目次

書齋の岳人

序

小 記

《藏本記》

ダアウインの『種の起源』初版を獲る記

ガウガンの日記に見えた日本美術

『サロメ』の初版本

購書日記抄

ゾラの『巴里』譯本及び原本

名家手澤本愛玩書志

一 エーツ自署詩集の話

二 クリスティナ・ロセツチイの手紙附き詩集

三 五

七

一四

二〇

二六

三二

四一

四二

四四

三	ホイツトマンの『草の葉』	四
四	ユーゴの自署寫眞	四
五	『ユーゴの邸宅』	四
六	ロマン・ローランの英譯本自署	五
七	ボードレールの自畫像	五
八	ガウガンの『ノア・ノア』(シャルル・モリス署名本)	五
	森の生活者ソローの日記 附『ウォルデン』書史	五
	《米國の巷にて》	
	亞米利加印象記	六
	渡米の東京大角力	六
	米國の文明批評——オスカア・ワイルドの見たる	六
一	桑港へ來た人々	六
二	機械の美意識	六
三	桑港滯在中のワイルド	六
四	坑夫の服裝讚美	六
五	鶏 肋	六

《山水帖》

桑港にて秩父宮殿下に拜謁の記

一萬一千尺の雲表にて

太平洋岸の山岳氷河

ウイムパアの刻描せる日本風景

富士山

山の誘惑

山岳と和歌

飛驒雙六谷日記

日本山岳文獻の小展望

《畫人錄》

大下藤次郎

「みづゑ」の刊行を繼續する辭

青木繁の挿繪本

丸山晚霞

九〇

九四

九七

一〇三

一一

一一四

一二八

一五五

一三三

一三八

一四二

一四六

一五二

茨木猪之吉

一五四

創作版畫家西田武雄——『エツチングの描き方』序

一五

《浮世繪雜綴》

ペルリ提督に依りて最初に紹介された浮世繪

一六

プレシデオ美術館の浮世繪陳列

一六

蘭夢女史製作の錦繪

一五

女に好かれる廣重

一八

焼失したる廣重東海道遺稿及び其板木

一六

三世豐國大首繪補遺

一九

劫火に燃えた浮世繪

一七

三世種彦書き入れの『増補浮世繪類考』

三二

小林清親の東京名所

三七

明治の石版

三〇

《泰西創作版畫》

西洋創作版畫の蒐集

三七

私の將來せる西洋創作版畫に就きて
創作版畫を持ち來つて

二五
二六

アルピニストの手記

序に代へて

二七

《アルピニストの手記》

日本アルプス早期登山時代

二七

槍ヶ岳からの黎明

二八

ウエストンを繞りて

二八

ウエストン寄附の登山帖

二九

山岳會の成立まで

二九

『山水無盡藏』といふ本のこと

三〇

『日本アルプス』の憶ひ出

三一

紀行文家の群れ——田山花袋

三一

ガウランドの登山事蹟 附 甲賀宣政氏の事ども

三九

桑港で迎へた山崎直方氏

三五

《私の遇つた登山家の印象》

ジエームス・ブライス先生

三四

王堂チエムバレン先生

三五

白井光太郎先生

三六

惡澤岳の發見者

三七

日本アルプスのぬし

三七

*

山岳美と日本精神

三八

セガンチイニ——山と高原の畫家

三九

辻村伊助のサン・モリツツ旅信

四〇

飛驒山中にある凡兆の句碑

四〇

廣重に描かれた日本南アルプスと北アルプス

四一

上高地は神河内が正しき説

四三

山の書籍國を行く

四四

山の本とその著者たち

四五

「山岳」雜誌の表紙畫

四六

『高山深谷』の話

四八

隨筆山又山

四七

争はれたるマツタアホルン

四九

生ひ立ちの記

四二

卷末剩筆

四四

我おもしろの記

我おもしろの記

五三

因縁本

五三

逸文

五八

明治文壇回顧録

尾崎紅葉の貧乏生活

五二

一葉女史自筆「たけくらべ」の原稿

五九

歌舞伎座の樂屋

五九

報知叢話から拾はれたちぬの浦浪六

五七

岩野清子の遺稿

五四

眉山の『ふところ日記』

五〇

正岡子規より與謝野寛への挑戦狀

五一

尾崎紅葉の自筆原稿 附『紅葉全集』再修の議

五二

解題・解説

近藤信行

五一

書齋の岳人

序

これは書齋に於ける一登山家の手記である。登山家の藏書でも、山の本や地圖と限られてゐないし、又登山家、必ずしも毎日ピツケルの穂先を磨きながら山と烈しい闘争の物語を讀んでばかりゐる。況んや、不勉強にして氣紛れなる老登山家に於てをや。

私は永く米國西海岸に滞在してゐたため、その間に、彼地の山谷も多少跋涉したが、その記録と研究は、先年『氷河と萬年雪の山』なる單行本として出版したから、山の方は、當分お留守になつてゐる。その外に於て、ロスアンゼルス市の街頭に、古本を冷やかした、^{サンフランシスコ}桑港ではおなじみの版畫舗に座り込み、泰西古今名家のエツチングや石版などを、賞玩してゐるうち、秀ぐれた藝術の魔魅の力に引き入れられ、軽い財布をはたいて、後で困つてばかりゐた。時には參考品として持參した自身愛藏の浮世繪を、求めらるゝがまゝに、ロスアンゼルス市の博物館、桑港の婦人俱樂部等に展覽に供し、或は講話にも應じ、藝術文化の上よりして、所謂日米親善に、多少なりとも資するところがあつたつもりである。そして又、求めらるゝがまゝに、最も多く米國の邦字新聞に、又は極めて稀に、英文雜誌にも、諸種の文章を寄稿したので、その數も相應に多く

なつてゐた。

しかも何事ぞ、本邦に歸朝するに當つて、故國より携帯持参したる浮世繪、又は彼地にて研究並びに鑑賞上、蒐集したる西洋藝術版畫に對し、關稅問題（之を稱して奢侈稅と云ふ）なるものが突發し、世の中の閑人たちに、ゴシツプの材料を供給したこともあつた。今にして考へると、登山家の書齋に於ける午睡の夢だ。だが、夢にしても、深い憶ひ出にはなる。

依つて、是等の文章の中から、主として在米時代及び歸朝後に起草した見聞記、隨感隨錄、古本漁りの話、浮世繪の研究並びに考證、問題の創作版畫課稅に對する公開の抗議文、舊刊本に洩れた拙作逸文、同じく内外山水の小記などを、取り纏めて、この冊子を編んだ。

想ひ見る、かの英國の登山家、レスリイ・ステイヴンズは『書齋の數時間』を著はして、英佛文學の諸名家を論じ、同國登山界の耆宿、ダグラス・フレツシュフィールドは、モン・ブラン最初の探檢登山家、オリス・ベネザクト・ド・ソシユールのために、詳密なる傳記を立てた。私の本書の如きは、素よりさやうに、纏まりのついた完本ではない。登山家が道草を喰つて、本道樂や版畫蒐集者になり、初版本や名家手澤本などを、少しばかり集めて見たが、僅かに指頭の感觸と古臭い匂ひを悦ぶだけで、内容の記述としては、皮下一寸記に過ぎない。要するに、この本は夫れゝの必要から書いた原稿を、長短精粗を問はず、投げ入れたルツクサツクである。定めて破綻だらけとは思ふが、私自身に捨て難い愛着の絆があるため、世に擔ぎ出す僭越を、敢へてしたのである。

昭和九年七月その日、

老鶯しきりに、庭後の竹林に啼く朝。

阿佐ヶ谷書屋主人

小 記

一、少雨莊のあるじ、齋藤昌三君、本書の装釘のために、苦吟せられ、^{まむじ}蓑蟲の蓑を、二ヶ月もかゝつて、丹念にあつめ、縫ひ合せて、表紙の背に著せられた。「^お蓑蟲の音を聞きに來よ草の庵」(芭蕉)の閑靜は吾書齋にないが、佗びしい山家の風情は、装釘の方にある。表紙は、南洋に産する一樹木を、板に挽いて、使はれたといふ。本書中の蠻人畫家、ガウガンの『ノア・ノア』時代の生活と、一味相通する氣がする。又見返しに、森林生活の聖者、ソローの住んだウオルデン湖の銅版深度圖を、原本から寫して、圖案代りに應用したのも、江湖蕭散の氣に打たれる、私は氣に入つた。一、書中の挿繪は、凡べて私藏の、初版本、原本、眞蹟書翰、原畫等から、直接に寫眞に取つた。孰れも今回、始めて世に出たものと信ずる。只だ北齋のスケッチだけは、震災で原畫焼失のため、故フエノロサ原著の挿畫本から、轉寫した。

一、各文末に記した年月は、發表當時のものであるが、各文とも、大抵は増訂したから、中には、日附け後に發生した事實が、本文中に書き加へてあるやうなことが、無いとも言へない。

